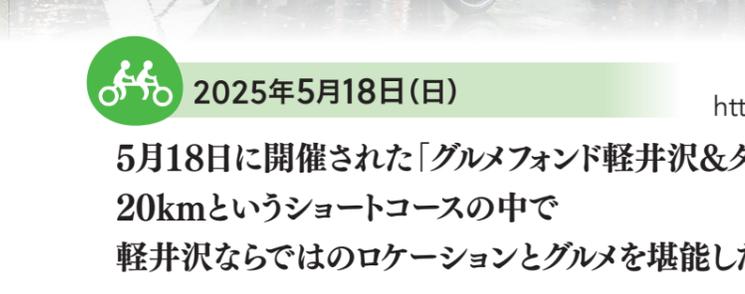
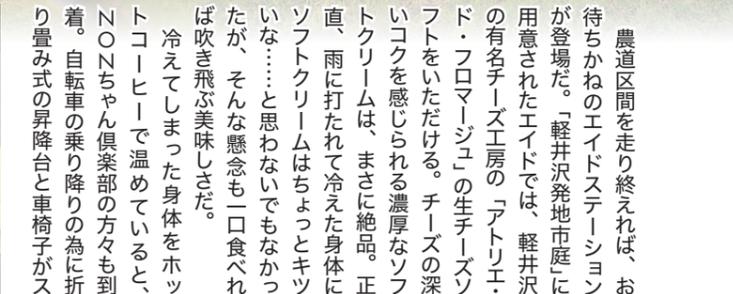


降りしきる雨もなんのその
自然と食を味わった

グルメ & タンデムフォンド軽井沢



 2025年5月18日(日)
出典元「シクロワイアード」
<https://www.cyclowired.jp/>

5月18日に開催された「グルメフォンド軽井沢&タンデムフォンド軽井沢」
20kmというショートコースの中で
軽井沢ならではのロケーションとグルメを堪能した1日をレポートしよう



text&photo:Naaki Yasuoka

バラバラと TENT を叩く雨のなか、ズラリと並ぶタンデムバイク。こんなに多くのタンデムバイクが並ぶ様を見ることはそうそう無いだろう。避暑地として名高い軽井沢に、10台をゆうに超えるタンデムバイクが集まっていた。

この日、雨に包まれた軽井沢。タリアセンは「タンデムフォンド軽井沢」のスタート/フィニッシュ会場となっていた。集まったのは、軽井沢の町と自然、そして豊かな食を楽しむ「グルメフォンド軽井沢」と「タンデムフォンド軽井沢」の参加者達だ。短いコースの中に軽井沢らしいグルメをたっぷり味わえるとあって例年人気のイベントだが、今年はかなりタンデムバイクの比率が高い。今回はなんと愛媛から「タンデム自転車NONちゃん倶楽部」の皆さんがやってきてくれたのだ。

NONちゃん倶楽部とは、タンデムバイクを通じて障がい者やその家族と交流し、「心のバリアフリー」を目指すNPO団体。健康者と障がい者が協力しあうことで、共にサイクリングを楽しむタンデムバイクの魅力を発信し続けてきた。そして、長野県は日本で初めてタンデムバイクの公道走行を許可した県でもあり、今年からは障がい者サイクリングの環境整備と普及啓発のため、グラン



ファンド軽井沢実行委員会と一般社団法人サイクリング・フェスティバルASAMAが長期的な連携を表明。その活動のファーストステップとして、今回のタンデムフォンド軽井沢にて、NONちゃん倶楽部の皆さんを招聘したのだという。

雨が激しかったこともあり、スタート前の整列は無し。NONちゃん倶楽部の皆さんを先頭に、いくつかのグループに別れ、三々五々走り出した。約20kmのコースとだけ聞くと、短くてちょっと物足りなさそうにも聞こえるけれど、いざ走り出せばかなり満足感のあるルートだった。

スタートすると間もなく軽井沢バイパスへ。こちらは片側2車線の幹線道路だけれど、ご心配なく。完全に車道と分離されたプロテクテッドな自転車レーンが整備されているのだ。大きな交差点以外では、車道との段差もほぼ存在せず、非常に安心して走ることが出来る環境が用意されている。

さて、二つ目の峠を越えて、次に向かうのは8の字の下側のループ。ちなみにループが交差する地点には、カーリングの強豪チーム・SC軽井沢の本拠地である軽井沢アイスパークが立地している。

下仁田街道を進み、右折するとこの日2つ目の登りが登場。先ほどよりも斜度は緩いが、その分距離が長めの丘だ。下った先で農道へ誘導される。田んぼやキャベツ畑を貫くストレートは、晴れていれば浅間山が見えそうなロケーション。



がある。そして一路南へと針路をとると爽快なダウンヒルへ。谷底に流れる湯川を渡ると、再び登り返すことになる。登り口には斜度10%を示す看板が。大きな弧を描くヘアピンがひとつだけと、距離としてはそう長くはない登りだけれど、タンデムライダーにはかなりの難所。自転車に乗るのをしばらくサボっていた私にとっても、壁であったことは間違い無い。

農道区間を走り終れば、お待ちかねのエイドステーションが登場だ。「軽井沢発地市庭」に用意されたエイドでは、軽井沢の有名チーズ工房の「アトリエ・フロマージュ」の生チーズソフトをいただける。チーズの深いコクを感じられる濃厚なソフトクリームは、まさに絶品。正直、雨に打たれて冷えた身体にソフトクリームはちょっとキツいな……と思わないでもなかったが、そんな懸念も一口食べれば吹き飛ばす美味しさだ。冷えてしまった身体をホットコーヒーで温めていると、NONちゃん倶楽部の方々と到着。自転車の乗り降りの為に折り畳み式の昇降台と車椅子がス

無事にフィニッシュした参加者たちには、ホットコーヒーとお饅頭が待っている。そして完走証と参加賞として軽井沢の有名ベーカリー「浅野屋」の紅茶ブレッドとイチゴジャムのお土産まで頂いた。

しかしメインディッシュとなる引換チケットがまだ残っている。なんとタリアセンのレストラン「湖水」の名物であるビーフカレーを頂けるのだ。雨に濡れそぼったサイクルウェアで訪ねるのも忍びないため、一旦着替えてレストランへ。

タリアセンオリジナルのビーフカレーは牛肉がゴロゴロ入った豪華な一品。思ったより激しめのコースではあったけれど、このカレーを美味しくいただくためだと思えば、納得だ。走ってよし、食べてよし。今年は景色は分からなかったけれど、きっと晴れば三拍子そろったイベントだったことは間違い無いはずだ。



今回遠路はるばる参加されたNONちゃん倶楽部の皆さんも、それぞれ楽しめたよう。「想像よりも厳しいコースでした(笑)でも、その分パイロットの障がい者が走り切った時の感動もひとしおでした」と語るのNONちゃん倶楽部代表の津賀さん。「彼ら自身にとっても大きな感動だったと思いますし、パイロットやサポーターしていたスタッフの皆さんにとっても、良い経験になったと思います」と、今大会を振り返る。

もともと津賀さんの夫であった徳行さんのニックネームから名付けられたというNONちゃん倶楽部。徳行さんは、扁桃腺治療の薬害によって視力障害を患ってしまったのだという。「タ

ンデム自転車で公道を走りた」という叶わなかった徳行さんの生前の願いを叶えるため、薫さんはNONちゃん倶楽部の活動を始めたのだという。

そんな津賀さんが大切にしているのが「誰一人取り残さない自転車文化」という考え方。速さや距離といった、ついサイクリストが寄り添ってしまいがちなわかりやすい指標ではなく、真に誰もが享受でき普く通じる自転車の楽しみ、存在意義。それが一体何であるのかは分からないけれども、目が見えずとも身体が思うように動かすとも自転車は楽しめるのだと、NONちゃん倶楽部の皆さんの走る姿が教えてくれた。